

雉子のはなし

昔、尾州遠山の里に若い農夫とその妻が住んでゐた。家は山の間の淋しい場所にあつた。

或夜妻は夢を見た。その夢に數年前になくなつた舅が来て、『明日自分は非常に危険な目に遇ふから、できるなら助けてくれ』と云つた。朝になつてこの事を夫に話した。二人とも、死んだ人が何か用があるのだらうとは思つたが、その夢の言葉は何の意味か分らなかつた。

朝飯の後、夫は畠へ行つたが妻は機織のために家に残つた。やがて外の方で大きな騒ぎが聞えたので驚いて出て見ると、地頭が大勢の伴をつれて狩獵のためにこの邊へ近づいて來た。見て居るうちに一羽の雉子がわきの方から家の中へ飛び込んだ。そこで不圖昨夜の夢を想ひ出した。

『事によればこれが舅かも知れない。助けて上げねばなるまい』——彼女は獨りで思案した。それから鳥のあとから急いで家に入つて——その鳥は綺麗な雄鳥であつた——造作なくそれを捕へて、空の米櫃の中に入れて蓋をして置いた。

しばらくして地頭の従者が幾人か入つて來て、雉子を見なかつたかと尋ねた。大膽にも彼女は否定したが、獵人の一人はその家へ鳥の飛び込むのをたしかに見たと云つた。それから一行は家の中をあちらこちらとさがしたが、米櫃の中には氣付かなかつた。そのあたりくまなく搜索した

が結局無駄であつたので、鳥はどこか穴からでも逃げたに相違ないとあきらめて人々は引き上げた。

農夫が家に歸つた時、妻は夫に見せるために米櫃に隠して置いた雉子の話をした。

『私が捕へた時すこしも抵抗しなかつたが、米櫃の中でもおとなしくしてゐます。きつと鼻様だと思ひます』と妻は云つた。農夫は米櫃の處へ行つて、蓋を取つて鳥を取出した。鳥は農夫の手に静にとまつて、そこに居ることに慣れて居るやうに農夫を見てゐた。一方の目が盲目であつた。『父の目は一方盲目であつた』農夫が云つた、『右の眼であつた、この鳥の右の眼が盲目だ。全くこれは父だらう。丁度いつもの父のやうな眼付で、この鳥が見て居る。……父は自分で「おれは今、鳥だから、獵師などにやるのなら一層おれの體は子供に喰はしてやる方がましだ」と考へたに相違ない。……それで、お前の昨夜の夢の譯も分つた』と氣味の悪いうす笑をうかべて妻の方に向つてかう云ひ足しながら雉子の頸をねぢた。

この野蠻な行を見て、妻は泣き聲を上げて叫んだ。

『まあ、この極悪非道の鬼。鬼のやうな心の人間でなければ、こんな事のできる筈はない。……こんな男の妻になつて居るより死んだ方が増しだ』

それから草履もはかずに戸外に飛び出した。男は女の飛び出した時に袖をつかんだ、が女は振切つて駆け出した。駆けながら泣いた。はだしで走り續けた。町に着いて、すぐ地頭の屋形へ急

いだ。それから涙とともに、獵の前夜の夢の事、雉子を助けたさの餘り隠した事、それから夫が自分を嘲つて、たうとうその雉子を殺した事の一切を地頭に話した。

地頭は女にやさしい言葉をかけた。そしてこの女を勞はつてやるやうに命じた。しかし夫は捕へるやうに部下に命じた。

翌日農夫は取調べを受けた。雉子を殺した事に就いて、事實を白状させられてから宣告を受けた。地頭は云つた。

『餘程の悪人でなければ、その方の行つたやうな事はやれない、そんな邪惡な人間の居る事は、その土地に取つて不幸である。ここに住んで、この掟を守る人々は皆、親孝行の心がけを敬ふ人々である、その方の如きものをその中に置く事まかりならぬ』

そこで農夫は、その土地から追放ときまつて、もし歸つて來たら、死刑に處せられる事になつた。しかし女には、地頭は土地を與へた、それから後になつてよい夫を持たせた。

(田部隆次譯)

Story of a Phœasant. (Koto.)